

銀<sup>ぎん</sup>

河<sup>が</sup>

伝<sup>でん</sup>

承<sup>しょう</sup>

銀河伝承

第一章

スード流星群

3

第二章

奇病の流行

18

第三章

キーナじいさん

34

第四章

神の文字

52

第五章

マイミ

70

第六章

出発

90

第七章

再びキリルへ

99

五十音表

109 / アーリー語辞典

110 / デザインノート

111・112

第一章 スード流星群

キリル暦二三年七月初旬、星の美しい夜だった。ビルフォードの街を北に見下ろす小高い斜面には、夜を待って多くの人々が集まってきていた。

その人々を、東に広がる宇宙港の照明がほのかに照らし出している。

草むらに座りこんだ人、立木にもたれて腕を組む人、あるいは草を枕に寝ころぶ人など、人それぞれの姿で私語を交わしたり、思いにふけったりしていたが、誰もが同じなのは、眼を北の空に向けていたことだった。

街の灯はそのほるか下だ。

人々が待っているのは、その夜、キリルの夜空で繰り広げられる、珍しい天体ショーだった。スードと呼ばれる流星群が降らせる光の雨を、こ

れから見ようというのである。

一万年に一度という、気の遠くなるような長い旅をしている、なぞを秘めた流星群だったから、それを見られるのは珍しいというより、たかだか百年単位の生を受けた地球人にとっては、むしろ奇跡というほうがいいのかもしれない。

ワープ航法を完成させた地球人が、キリル星を発見したのが二五年前の二四七一年。その後の調査で、大気や地形を始め、すべてがキリル星は地球とそっくりなことが確認された。スペースコロニーでも人口爆発をおさえきれなくなった地球人が、この星を格好の移民地と考えて当然であった。

ちよつと見ただけでは、地球人と区別がつかない温厚なキリル人たちも、未知の文明をもたらした新しい住民を、なんの抵抗もなく迎え入れ

てくれた。そうして二五年がたったいま、この星には地球人とキリル人がほぼ同じ数で仲良く暮らしている。

そのキリルで、地球では絶対に見られないスード流星群の光の雨が見られるのだ。しかも百年に一度などという出会いではないのである。人々が興奮して集まってきても無理はなかった。

そのふもとの人込みをぬって、サトルは足を速めていた。スポーツで鍛え抜かれた長い脚が、まるでバネのように地を蹴る。耳まで伸びた黒い髪が揺れる。

あたかも宇宙の広がりをおもわせるような黒い瞳と黒い髪は、サトルが地球の、それも東洋人と呼ばれていた種族の血をひいていることを示している。つねに神秘的な場所として語られている東洋の端に、小さな島国がある。それが地球に宇宙世紀をもたらした「ニッポン」であり、「サト

ル」という名前なまえは、その国特有くにとくゆうの名前なまえなのだ。

ライルならいいが、遅おくれたら口の悪いわるリタにまた何なにをいわれるか。そう思うおもと、さらにサトルの足あしは斜面しゃめんではねた。

ライルとリタはサトルの幼おきななじみであり、ビルフォード・パブリックスクール高等部こうとうぶの同級生どうきゅうせいであった。将来しょうらいの目標もくひようも同じおなにだけ仲間なかもいい。

三人にんともハイスクールを修了しゅうりょうしたら、航空宇宙大学こうくううちゅうだいがくへ進学しんがくして、やがては宇宙船うちゅうせんに乗のって働はたらこうと決めていた。

サトルの希望きぼうはパイロットコース。

機械きかいいじりの好きすなライルは機関きかんコース。

そして女おんなの子このリタは、宇宙生化学うちゅうせいかがくのコースへ進すすみたいと思おもっていた。

もちろん三人にんにとって、今夜こんやの流星群りゅうせいぐんは見逃みのがせないもののひとつだった。だから丘おかの頂上ちようじやうで待ち合あわせたのだが、もうその時間じかんは過すぎていた。

サトルの足がはねるに従って、次第に人込みは薄れ、頂上付近では人影もまばらになった。サトルが肩で息をするほどだから、さすがに頂上まで登ってくる人は少ないのだろう。

その頂上の眺めのいい場所に、二人は背を見させて座っていた。

ライルの背中が大きい。一八〇センチ、八五キロ。だから並んでいるリタがほっそりみえる。

近づくるとリタの横顔が、宇宙港の淡い光に浮かんでいた。地球ならインド系の混血と呼ばれるリタの顔は彫りが深い。すっきりと大きな瞳、そうしてそれをやわらかく支える丸みを帯びたあごの線。淡い光のせいもあってか、リタは昼間の彼女と違って、いい雰囲気を漂わせる美人だった。

「やあ、遅くなってごめん。」

サトルはそう言って二人に並んで座った。

「一五分の遅刻よ。」とリタが時計に目を走らせて言った。

「でも遅刻常習犯のサトルにしちや上出来のほうだわ。」

口の悪さだけは昼間とちつとも変わらない。

「よく言うぜ、自分だってついさっきだろ。」

ライルがリタの向こうから口を挟んだ。体と同じように声も太い。

「私は宿題を片付けてきたのよ、ちゃんど。」

澄まし顔でリタが言うど、ライルも負けてはいない。

「ふん、つまらんことだけまじめな人だ。」

「へえー、明日の地球史のノート、どうなってもいいわけ？」

リタとライルは同じクラスである。だから歴史に弱いライルにとって、

それが得意なリタのノートは大きな武器だった。あっさり一本取られたラ

イルは、ちよっぴりほおをふくらませて黙るしかない。



顔の面積のわりに目鼻や口が小づくりなライルの童顔からは、天才的とされる機械いじりの腕は想像がつかない。エアスクーターをチューンナップして、最高スピードで二〇パーセント以上も引きあげ、時速二五〇キロまで出せるようにしたのは、つい先日のことだった。

しかしライルの運動神経では、そのスピードについていけないから、それはあくまで可能性だけに終わっていた。

それをリタに指摘されたときも、ライルはふくれっ面をしていたが、今度もまたパンダがすねたようにしている。その感じがおかしいのか、リタがライルの顔をのぞきこんでクスツと笑った。それでライルはさらに不機嫌になって、鳥の巢のようなモジャモジャ髪の後ろへ両手を組んで、顔を背けながら巨体をどきっと草の上へ投げ出してしまった。

会話が途切れると、その音が響いたただけであたりは静かになった。サト

ルもライルをまねて草を背に寝転んだ。

斜面を渡つてくる風には、潮の香りと草木のにおいが混じって、その風がリタの長い髪を揺らし、そうしてなにかを運んできていた。

そのなにかとは、サトルがさつきから気になって思い出せないでいたものだった。それがキーナじいさんのことだとわかったのは、リタの髪だったか、それを揺らせた風が運んできたにのせいだったろうか。

そのキーナじいさんと呼ばれるキリル人は、黒いポロ布を体に巻きつけ、ボサボサの白髪とこれまたまっ白なヒゲに埋もれたしわだらけの顔をした老人だった。体からはかすかに潮と草木の香りが漂っていたし、歩くと白髪と白いヒゲが揺れたから思い出したのかもしれない。

ビルフォードの街から東に数十キロ離れたところに、ファブの神殿という古い遺跡があつて、キーナじいさんは自ら神の使いと名乗ってそこに住

んでいたが、かつてその神殿を守っていた神官の子孫ともいわれているように、時折り街までやってきては、ひとしきり辻説法をしてゆくのだった。身なりも異様だったが、その説教の内容も異様だった。サトルも何度かそれを聞いたことはあったが、「夕陽の森に赤の種を植えると、希望の朝には力の実がなる。」などと言われても、なんのことかわからなかった。だから昔はいざ知らず、キリル暦になってからは誰も相手にする人はいなくなつた。それでもじいさんは街へやってきて、なにかをつぶやいて去つてゆくのである。

そうして今日もキーナじいさんはやってきていた。サトルは家を出たところから出てくわしたのだった。キーナじいさんは言っていた。

「天から火の降る年には……石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ます。」  
もしかしたらそれは、とサトルはぎくくと立ち止まって思った。流星

のことを言っているのではないか。だから少しだけ耳を傾け、さらに時間に遅れることになったのだ。

「天から火の降る年には……。」

北の空に少しずつ流れ出した光をみて、サトルは思わずつぶやいていた。

「なあに、それ。」

耳ぎとく聞きとったりタが尋ねた。

「いや、別になんでもないんだ。」

「なによ、そっけないんだから。天から火の降る年って、なんのこと。」

そこまで言われると、無口で面倒くさがり屋のサトルとしても答えざるを得ない。

「キーナじいさんが言ってたんだ。」

「へえ、あのおじいさんの話なの。よく聞く気になったわね。でも、なん

のことかしら。」

「もしかしたら、流星のことかなあ。」

ライルが興味深そうに沈黙を破った。黙っていられない性分である。

「ぼくもそう感じたんで、しばらく聞いていたんだけどね。」

「で、おじいさんはそのあと、なんて言ったの。」

「石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ますって。」

「なによそれ、石の国の悪魔って。」

「わからない。人を石に変えるというようなことをつぶやいていた。」

「へえ、恐いのね。」

リタはバカにした口調だったが、ライルは興味深そうに「それで？」と

サトルを促した。

「神に祈れってさ。」

「やっぱり、いつもの結論じゃない。」

リタが突き放すように言い切った。

「いや、今日のはもう少し先があった。その神の国には、石になった人を元に戻す薬があるんだって。昔キリルが悪魔に襲われたとき、恋人を石にされた若者が、その薬を捜しに神の国へ行つたとかいう話らしかった。」

「ふーん、おじいさんの話にしちゃ、なかなかロマンティックな展開ね。」  
リタはもうその話題には興味をなくしたらしく、そう言うときライルのほうを向いて、なにやら話しはじめてしまった。

サトルの思いも、やがてキーナじいさんから離れていき、恋人と言ったことから、ガールフレンドのエミリアのことを思い出していた。今夜も誘ったのだが、エミリアの家庭は厳しくて、夜の外出は禁止なのである。

エミリアはサトルより一つ年下で、小柄だがサトルと同じようにスポー

ツが得意だった。栗色の少し内側へカールした髪が、活発に動く深い緑色の瞳によく似合つて、サトルはエミリアがこの春に地球から移民してきたとき以来というもの、次第にあふれる思いに耐えきれなくなつていった。だから無口で恥ずかしがり屋のサトルでも、意を決して思いを打ち明けられたのである。エミリアも思いは同じだった。

サトルにガールフレンドができたとき、ライルもリタも信じられぬ思いで話し合つた。サトルは女の子から話しかけられても、なにを話していいかわからないほど内気なので、自分から声をかけることなど、考えられないことだったのだ。

なにか大変なことでも起こるのではないかと、ライルとリタはささやきあつたものだが、その二人の交際も、すでに三カ月を経てもうすぐ夏休みに入る。

エミリアと一緒にどこへ行こうか、とサトルは考えていた。海か山か、それともジェットホッケーでも観に行くとするか。

そのとき、それまで少しだった光の雨が、急に輝きを増して空一面に流れ出した。まっ黒のスクリーンに、光の矢が美しい直線と曲線を描いて降り、それはつきつきにあふれるように現れては消えるのである。

「わあすごい。」とリタが、ひととき長い尾を引いて流れた星を見て歓声を上げた。

「ねえ、いまの見た、見たでしょう。」

「見たよ、あれだけ大きかったら、燃え尽きずに地上まで落ちたかもしれないぜ。」

ライルが答えていた。丘の斜面からよめきが風に乗って伝わってくる。



実際、それは見事な天体ショーといえた。三人はただぼうぜんと見とれていたが、サトルはふと、美しすぎるものには毒がある、と不吉な予感におののいて、慌てて思いを散らすように立ち上がったのだった。

## 第二章 奇病の流行

「やっぱり昨日より大きくなっている。」

「私のもそうよ、おかしな症状ね。」

流星群をみた日から四日後の朝の食卓だった。サトルの父と母が話していた。

食卓にはトースト、ハムエッグ、ミルクとサラダが並べられていて、どれもがキリル人の農場から直接買った新鮮なものばかりだった。とくに野菜は、地球よりはるかにおいしいと言われていた。

だが、そのみずみずしいサラダとは似合わない会話だった。父は、左手の甲にできたコインほどの硬いかたまりをなで、母も足首にできた同じも

のを、おそるおそるなでていた。

「チャドラ先生は、なんて言ってるの。」

サトルは思わず聞いていた。チャドラ先生とはビルフォード医大の皮膚科の助教で、リタの父親でもあった。

「昨日の診察では、皮膚がつめと同じように角質化しつつあると言っていた。先生にも初めてのケースらしい。ここ数日で同じような症状の人がずいぶんふえているというが、とりあえず様子を見るしかないだろうって。」

父の説明が終わるのを待って母が言った。

「サトルは別に異常ないんでしょね。」

「うん、ぼくはない。でもエミリアが首のところにてきてるし、クラスにも一〇人ほどいるんだ。顔にてきてるのもいるよ。」

「なんだか気味が悪いわね。」

母が美しいまゆを曇らせていた。

「でも生命に別状はないと言っているんだろう、そのうちきつと治るさ。」

父が気軽に言った。サトルは、あの夜の不吉な予感を思い出したが、登校の時間が迫っていたこともあって、玄関を飛び出したときにはもう忘れてしまっていた。

だが、その日の午後、サトルたちが知らないところで、緊急な事態が迫っていることが話し合われていたのである。

そこはビルフォード医大の学長室だった。数人の医師が深刻な面持ちで、壁にはめこまれたディスプレイに見入っていた。

縦に一本の線で区切られた画面には、右にも左にも同じような形が映っ

ていた。白いテーブルに真珠をばらまいたような映像である。

「左が患者の皮膚から採取したもので、右がスードいん石の断面からみつけたものです。」

説明しているのはチャドラ助教だ。浅い褐色の顔。秀でた額と高い鼻が彫りの深さを際立たせ、やせた体とあいまって精かな感じを与えている。面影はリタに似ているものの、その表情には明らかに疲れがあった。

「同じウイルスだね、チャドラ君。やはり君の説どおり原因はスード流星群だったのか。」

白髪まじりのでっぷりした医師が、鋭い眼光で画面を見ながら言った。ビルフォード医大の学長である。

「そうです。でも原因はわかって、手の打ちようがない点ではなんら変

わりません。」

チャドドラ助教授は両手で頭を抱え、近くのソファに身を沈めた。

「流星が大気摩擦で溶けたときに、かなりの量のウイルスが大気中にまき散らされた。それが症状の流行につながったわけだな。」

学長もそう言つてソファに腰を落としました。

「何しろ耐熱実験では、二三一六度までやってみても死ななかつたやつなんですよ。効く薬がないんです。手術ではぎ取るにも、ずいぶんと奥深く角質化が進んでいますし、まず再発を防ぐことも難しいでしょう……。」

「症状の進行状況はどうなんだね。」

チャドドラ助教授の悲壮な声に口をはさんだのは付属病院の院長だった。

「はい、私の診ている患者に関する限りですけど、少なくとも半年で全身

に角質化は進むと思ひます。皮膚がつめのようになるわけですから、しばらくは生命も維持できるでしょうけれど、それも時間の問題です。」

「ウイルスが大気中に散ったにしては、症状の出ない人がいるのが変だな。」

「それが不思議といえは不思議な点です。現在のところ、キリルの全人口の三分の二は難を免れていると思ひますが、といってその理由はさっぱりわかりません……。」

「よし、いずれにせよ政府に言つて宇宙港を閉鎖してもらおう。こんな厄介なウイルスを地球にまで持ち込んだら大変だ。」

「その点でしたら、一応の手は打つてあります。昨日の段階で宇宙港に連絡しました。流星の夜よりもあとに出発した船で、地球に着陸したものはまだないそうです。」

「それは手回しがよかった。じゃ私はすぐ政府首脳に会ってくる。奇病の緊急対策予算も捻出してもらおうよう頼んでおこう。ともかくできる限りの研究は続けてくれ。」

学長はそう言い残すと、太り気味の体にもかかわらず素早く身をひるがえしていた。

翌日、朝のニュースは宇宙港の閉鎖を報じていた。そしてそれに伴って、医大からは病気に関する発表があった。奇病はスード病と命名され、原因はスード流星群のもたらしたウイルスであるとのみ報じていた。空港の閉鎖も、病気の流行がおさまるまでの一時的処置ということであった。

もちろん、スード病がやがて全身に広がってしまふ恐怖や、その治療法が見当たらない不安については伏せられていた。だから宇宙港の再開



のメドについても、発表はひと言もふれてはいなかったのである。

そのニュースを知ったとき、サトルの頭にひらめいたのは、不吉な予感とキーナじいさんの言葉だった。

——天から火の降る年には……

石の国の悪魔が永い眠りから目を覚ます。

しゃがれ声がよくみがかっていた。いまその言葉を思い起こしてみると、なんだか状況が似ていなくはなかった。

天から降る火であるスード流星群が、人の皮膚を硬くする石の悪魔を、一万年という永い時を超えてキリルにもたらした。

スード・ウイルスが石の悪魔だったとしたら、とサトルは考えてがくぜんとした。キーナじいさんは現状を予言したことになるのだ。あるいは予言でなくても、そのときにもあった同じ病気の流行を、じいさんは

代々にわたって語り聞かされてきたのかもしれない。

あの時じいさんは、神の国に薬があつて、恋人を石にされた若者が取りに行つたとも言つた。サトルは自分がその若者になり、エミリアを助ける場面を空想してから、慌てて首を振ってそれを打ち消した。エミリアの全身が石になつてしまふなんて、考えただけでも耐えられないことだつた。

一週間が過ぎた。

宇宙港の閉鎖は続いていだし、エミリアの、そして両親の不気味な角質部分は、かなり広がつてきている。ライルの妹も肩に症状が現れたと聞いた。みんな医大の塗り薬をつけているが、効いているのかさえ怪しい。夏休みに入った日、サトルはリタから電話で呼び出された。至急の話があるから来てほしいということだつた。ライルにも連絡したという。

サトルはすぐライルを誘つて駆けつけた。

リタは二人を居間に通した。明るくて広い部屋は、木の家具で統一してあって落ち着いた雰囲気だったが、リタの言い出したことは落ち着いて聞いていられるものではなかった。

それでも最初、リタは冷静だった。家の人は留守らしく、リタは自分でうんと冷えたソーダ水のコップを、強化ガラスのはめこまれたテーブルに並べた。だが、二人に向かってテーブルに着いたリタは、しばらく黙っていてから、ふいに涙ぐんだのだ。

「ごめんなさい……でも私、恐いの。」

声も心なしに震えを帯ていた。気の強いリタが、とサトルは身構える。

「私ね、昨夜恐ろしいものを見てしまったの。あなたたち以外に言えることじゃないのよ。」

「どうしたんだ、リタらしくないぜ。」

ライルがおどけた調子で言ったが、リタの表情は真剣そのものだった。「私ね、コーヒーをいれてパパの書齋へ持って行ったのよ。そのときちょうどパパはトイレへ行っていないかった。だから私、待っていて机の上の書類を見てしまったの。」

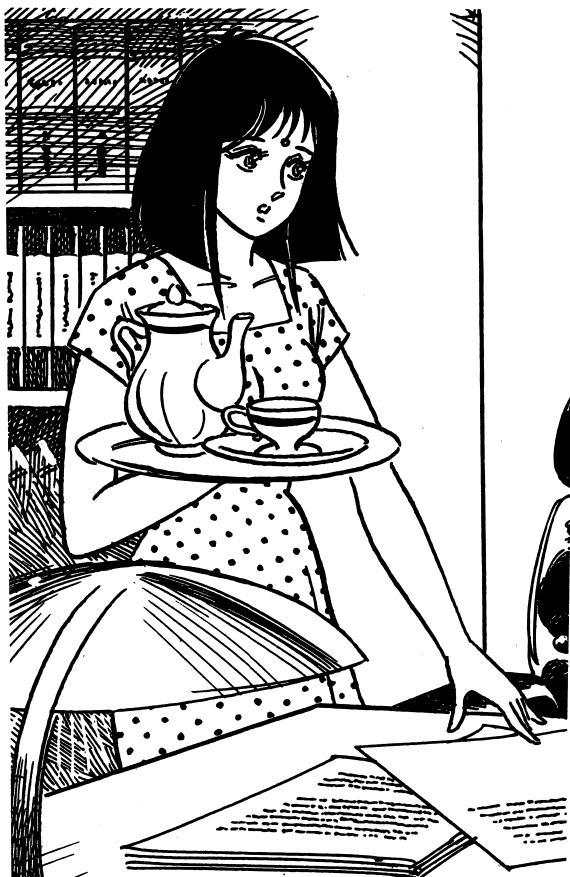
「そりゃ、盗み見しちゃいかんな。」

ライルがちゃちゃをいれた。いつもなら負けじとすぐ切り返すリタを期待したのだろうが、今日のリタは素直だった。

「ええ、いけなかったのよ。その書類、キリルの政府筋から出ているものだったの。そしてそこに書かれていたのは……。」

とリタはそこで言葉を切り、ソーダ水をごくりと飲んで続けたのだが、それは次のような重大なことであった。

リタが読んだ書類は、スード病の治療方法がないことを絶対に漏らし



てはいけない、という機密書類だった。薬の効果はなくとも、患者に安心感を与えるために出し続けること、半年で角質化が全身に及ぶことが漏れたら、大パニックが起こるから、治療法の見つかる可能性が数パーセントでも残されているうちは、絶対に秘密は守るようにと政府が要請しているものだったのである。

「なんだって！」

サトルとライルが一緒に叫んだ。「治療法がない」、というリタの言葉がコダマのように響き続けていた。エミリアの、そして父や母の、さらにはライルの妹の全身が、つめで覆われてしまった姿が脳裏に浮かんだ。それは打ち消しても打ち消しても浮かび上がってくる。やがてリタが再び口を開いた。

「私のパパも……本当はスード病にかかっているの。背中だから誰も知ら

ないけれど。」

リタは涙声なみだこゑになっていた。その涙なみだがほおを伝つたってテーブルに落ちる。危機ききのときこそ落ち着おくんだ、とサトルはその涙なみだを見ながら自分じぶんに言いいきかせていた。すると、なにかの本ほんで読よんだ言葉ことばが思い出だされた。

『希望きぼうは光ひかりだ。つねに希望きぼうを失うしなってはならない』

サトルは気きを取り直なおしてリタに尋たずねた。

「チャドラ先生せんせいは、リタがその書類しよるいを見みたってこと知しってるの。」

「ううん。」とリタが涙なみだをぬぐって答こたえた。

「パパが帰かえってくる前まえに部屋へやを出でて、コーヒーを入いれ直なおしてきたから知しらないわ。」

「じゃあ、ぼくたち以外いがいは誰だれも知しらないんだね。よし、この秘密ひみつは守まもろう。世間せけんに知しれたら。それこそパニックだ。」

サトルの言葉にライルもうなずいていた。

「ごめんなさい。あなたたちを苦しめるだけなのに、私、話してしまつて。」

「いいんだ、幼なじみじゃないか。将来も一緒に働くんだろう。それよりチャドラ先生も大変だ、先生がスード病だなんて。」

「でも、私にはパパを手伝えることがなにもないの。」

リタはサトルの慰めにまた悲しくなったのか、両手で顔を覆っていた。

サトルは、ふとキーナじいさんについて考えていたことを話してみる気になつた。

「先生の手伝いになるかどうかは、まったく当てにはできないけれど、ちよつと手掛かりになりそうな話があるんだ。実はあの流星群を見た日に言つたキーナじいさんのことなんだけれど……。」



そう言<sup>い</sup>つてサトルは自分<sup>じぶん</sup>の考<sup>かん</sup>えを述<sup>の</sup>べた。

「なるほど、もしそれが予言<sup>よげん</sup>というより言<sup>い</sup>い伝<sup>つた</sup>えだとしたら、神<sup>かみ</sup>の国<sup>くに</sup>に薬<sup>くすり</sup>があるっていうのもデタラメじゃないかもしれないな。」

ライルが素早<sup>すばや</sup>い反<sup>はん</sup>応<sup>おう</sup>を示<sup>しめ</sup>して言<sup>い</sup>った。

「とにかく人間<sup>にんげん</sup>が石<sup>いし</sup>みたいになるとい<sup>い</sup>う恐<sup>おそ</sup>ろしいこと<sup>こと</sup>が現<sup>げん</sup>実<sup>じつ</sup>に起<sup>お</sup>こりつつあるんだ。キーナじいさん<sup>はなし</sup>の話<sup>はなし</sup>をもう一度<sup>ど</sup>詳<sup>くわ</sup>しく聞<sup>き</sup>いてみるだけの価<sup>か</sup>値<sup>ち</sup>はあると思<sup>おも</sup>うよ。」

「そうね。たとえ数<sup>すう</sup>パーセントでも可<sup>か</sup>能<sup>のう</sup>性<sup>せい</sup>があるのなら、やってみるべきだわね。」

リタも元<sup>げん</sup>氣<sup>き</sup>を取<sup>と</sup>り戻<sup>もど</sup>しはじめていた。

「じゃあ、明<sup>み</sup>朝<sup>あさ</sup>にフアブ<sup>みょうちよう</sup>の神<sup>しん</sup>殿<sup>でん</sup>に行<sup>い</sup>つてみようよ。朝<sup>あさ</sup>早<sup>はや</sup>くなら、きつとじいさんもいると思<sup>おも</sup>う。思<sup>おも</sup>いたつたら即<sup>そく</sup>実<sup>じつ</sup>行<sup>こう</sup>さ。」

### 第三章 だいしやう

### キーナじいさん

翌朝、三人はまだ陽が昇らないうちにビルフォードの街を出た。

サトルの胃には、出がけにつまんだクラッカーとチーズが少し入っているだけだが、これからのことを考えると空腹感はなかった。

「こんなに朝早くて大丈夫かな。オレのエアスクーターなら数分だけ。」

ライルが少し心配そうに、それでも自慢げに言った。

「平気、年寄りって朝は早いから。もつとスピード出したって大丈夫。」

リタは一晩寝たら落ち着いたのか、日頃の調子を取り戻していた。

「早く行って起きるのを待つほうが、留守に行行って待つよりいいさ。とにかく出発だ。」

サトルの声こえに、三人にんを乗のせたエアスクーターは音おともなく宙ちゆうに浮うくと、東ひがしの平野へいやに向むかって滑すべるように走はしりはじめた。

ライルの言いったように、一五分ふんご後ごにはファブの神しん殿でんに着ついていた。

ちよつとした高台たかだいにあるその神しん殿でんは、神しん殿でんというにはあまりにもうらぶれた廃虚はいきよだ。崩くずれたり折おれたりした柱はしらが何本なんぼんもある光景こうけいは、サトルがマイクロフィルムひやつかじてんの百科辞典ひやくかじてんで見た光景こうけいに似にていた。それは地球ちきゅうの遺跡いせきで、パルテノン神しん殿でんと説明せつめいがあつたのを覚おぼえている。

西にしから来きたサトルたちは、神しん殿でんの裏側うらがわに音おともなく滑すべるように着ついた。スクーターから降おり、夏草なつくさの繁しげる神しん殿でんに足あしを踏ふみ入いれると、林立りんりつする石柱せきちゆうの右みぎのはずれに、キーナじいさんの住居じゆうきよらしき石小屋いしごやが見みえてきた。

「まだ寝ねていると悪わるいから、東ひがしの正面しょうめんのほうへ回まわってみよう。」

サトルの言葉ことばで、三人にんは足音あしおとを忍しのばせながら石柱せきちゆう伝つたいに歩あるいていった。

「おい、見ろ。じいさんだ。」

ライルが低い声で言った。ライルの指さす方をみると、東端の崖の上でじいさんは、朝日に向かってひれ伏し、両手を上げ下げしていた。

「朝のお祈りのようね。近くまで行って終わるまで待ちましようよ。」

リタが唇に指をあてて言うのと、また忍び足で歩み出した。そして三人が近づいたとき、祈りが終わったのかじいさんは立ち上がって腰を伸ばした。

その背へ向かってサトルは呼びかけてみた。

「キーナじいさん……おじいさん。」

サトルは最初はこわごわと、そして二度目は思い切って声を高めた。しかしじいさんは振り向きもしない。耳が遠いのか、それとも自分の名前さえ忘れてしまったのか。そのときライルが、サトルの脇腹を突っついてき

さやいた。

「そういえばあのじいさん、神の使者と呼ばないと返事しないって、誰かが言ってたぜ。」

サトルはうなずいてから声を張り上げた。

「神の使者よ。」

キーナじいさんがゆっくりと振り向いた。白髪と白いヒゲが揺れ、じいさん特有のにおりも陽の中に漂った。

「なんじゃな、なにか用でもあるのか。」

長く伸びた白いまゆげに隠れそうなほど落ちくぼんだ眼が、ギョロリと光ったように見えた。

「キーナじいさん……いや神の使者よ、少しおうかがいしたいことがあるんです。ここでよろしいでしょうか。」

「ふむ……。」

ちよつともつたいぶつた様子でヒゲに手を当ててじいさんは言った。

「話によつてはじゃがのう。」

しかしその口もとほゆるんでいた。日頃は無視されているのに、丁寧に扱われて悪い気はしないのだろう。

「話つてね、おじいさん。」

今度はリタが言った。ライルがリタのひじを突つく。神の使者と言えと  
いう意味だろう。

だがじいさんは、今度は目もとに笑みをみせた。

「どんな話じゃ、娘さん。」

「はい、天から火の降る年のことです。」

リタの言葉をサトルが補足する。

「そうです。人を石に変える悪魔と神の国の話を、もっと詳しく知りたいんです。」

キーナじいさんはそう言ったサトルのほうに、再び鋭い目を向けた。サトルは思わず首をすくめ、ここはリタに任せたほうがよさそうだと思った。じいさんは再びリタに視線を移して言った。

「いいじゃろう。そこに座りなさい娘さん。あんたたち二人もその辺にな。」

キーナじいさんは、リタに座りやすそうな手頃な石を指し示すと、男二人にはついで地面をたいた。ライルがサトルの耳もとでささやいた。

「どうしてリタだけが特別で、オレたちはこうなんだ。」

「いいよ、ここはリタに任そう。黙って聞いていたほうがよさそうだ。」  
サトルはこれも小声で答えて、リタの後ろにある大きめの石へ勝手に腰

を下ろした。ライルも真似て隣へ並ぶ。

「近ごろの奴らは、どいつもこいつも聞く耳を持たん。」

キーナじいさんがそう言うのと、サトルはまた身をすくめた。地面を指したのに、勝手に石へ腰かけたことを言われたと思つたのだ。ライルも慌てて腰を浮かしている。しかしじいさんの言葉は、二人のことではなかつた。「せつかくわしが街まで説教に行つても、みんなわしを無視してしまふ。そこへいくと娘さんはなかなか熱心そうじゃ。若いもんはこうでなくちやいかんぞ。」

キーナじいさんは、前置きついでに説教まで始めるつもりらしい。流星群の日の夕方、サトルはそのキーナじいさんの説教に耳を傾けたのに、目に入らなかつたのだらうか。

「おじいさん、肝心の天から火の降る年のことですけれど。」



リタが説教はごめんとばかりに催促する。

「おお、そうじゃったな。大昔のキリルには天から火が降った年があったんじや。」

キーナじいさんは、やっと話し出した。そしてサトルが聞いた若者のことまでを、ひととおり話し終えた。すかさずリタが質問した。

「おじいさん、どうしてその話を知ってるの。」

「それはじやな、ファブの神殿に昔から伝わるたくさんの話のひとつだからじや。」

「誰に教えてもらったの、おじいさん。」

「それは、わしの祖父からじや。ファブ神殿の神官をしておったわ。」

どうやら、キーナじいさんが神官の子孫といううわさは本当かもしれないとサトルは思つて、「おじいさん。」とリタの後ろから呼びかけた。

しかしまた、キーナじいさんはギョロリと目をむいただけで返事はしなかつた。

「神の国と薬について詳しく聞いてくれ。」とサトルは仕方なく、リタにささやいた。

リタがうなづく。自分の役どころを心得たらしい。

「おじいさん、神の国ってどこにあるの。」

「それじゃ。わしにもどこにあるかはわかっておらん。だがな、神の国は六つの島じゃといわれておる。中心の大きな島と、それをとりまく五つの島があるんじゃ。」

「そこに、石の悪魔にやられた人を治す薬があるというのね。」

「そうじゃとも。恋人を石にされた若者が取りに行つたんじゃ。その当時は、ファブにまだ神が住んでおられたから、若者は神から翼をもらって飛

んで行つたと伝えられておる。」

キーナじいさんはそこまで話したとき、ふとなにかを思い出したらしく、右のこぶしで左の手のひらをポんとたたいた。

「おお、忘れておったわ。神から翼のほかに、石板ももろうたんじゃった。」

「石板って、なにかしら。」

「薬のありかを書いた石の板じゃよ。娘さんはわしの話に興味があるんじゃない。それならどこかにあったはずじゃ、どれ、捜して見せてやろうとするか。」

「おじいさんありがとう。」

リタはうなずいてから明るい声で言った。

キーナじいさんが背を見せると、ライルが興奮をおさえかねたような声を

で言った。

「おい、なんだか本物らしくなってきたぜ。」

サトルもうなずいた。

キーナじいさんの話はまったく思いがけないものだったのだ。神の国の薬を示す石板が本当に存在するのなら、伝説めいた話にも真実味が加わってくる。もしかしたら、スード病に効く薬が実在する可能性だってなくはないのである。

「でも、なんだか信じられない話ね。」

「しかし、本物だったらすごいことになる。」

「昔の若者みたいに、オレ達で薬を取りに行くことになるかもしれないものな。」

ライルとリタが話していると、キーナじいさんが縦二〇センチ、横三〇



センチほどの黒い石の板を手に戻ってきた。

「娘さん、これじゃこれじゃ。」

キーナじいさんがリタに手渡したものを、サトルとライルが背後からのぞき込んだ。

そこには奇妙な文字が刻みこまれていた。中央の部分がすりへっているが、上と下は鮮明だった。しかし初めてみる文字である。サトルは胸が高鳴った。キーナじいさんがいまこれを読んでくれるのだろう。その思いはリタも同じらしかった。

「おじいさん、なんて書いてあるの、読んで。」

だが、じいさんの返事は簡単だった。

「いや、読めんのじゃ。神の文字を読める者は誰もおらぬのじゃよ。」

「えーっ、読めないのー。」

リタが落胆らくたんの声を上げたこえあ。サトルも期待きたいが大きおほかったただけにがつくりとひぎを落おとした。

石板せきばんはあっても、それが読よめなければ無用むようの長物ちやうぶつではないか。さらに石板せきばんの文字もじも、薬くすりのことが書かいてあるかどうか怪あやしくなってしまう。

「でもね、おじいさん。」リタもそのあたりを感かんじ取とったらしく言いった。

「読よめないのに、どうして薬くすりのことが書かいてあるとわかるの。」

「それはじゃな、昔むかしから言いい伝つたえられておるからじゃ。」

キーナじいさんは平然へいぜんとしていた。その言葉ことばにうそはないように思おもえた。代々だいだいにわたって口くちで受うけ継つがれたものを、じいさんもひたすら言葉ことばでのみ街まちの人々ひとびとに言いい伝つたえていたのだろう。それとも、ぼけているのだろうか。

サトルはふと疑問ぎもんを感かんじた。

「本当ほんとうに誰だれも読よめないの。」

リタも念を押した。

「ああ、わしの祖父も読めんかったからの。」

キーナじいさんはそう言うのと、もう話は終わったといわんばかりに立ち上がった。

リタは向き直ってサトルとライルに言った。

「残念だわ。でもこの石板がかなり古いものだったことは間違いないですよ。」

「もしかしたら、本当に一万年前のものかもしれないぜ。」

ライルがくやしそうに言う。思ひは三人とも同じなのだ。サトルも心残りでつぶやいた。

「どこかに読める人はいないかなあ。」

「そうね、そういう人を捜すしかないわね。」



リタも唯一の手掛かりを失いたくないのだろう。そのときは、三〇分後に自分がこの文字を読み取ることができるとなど、思いもよらなかつた。「ともかく、この石板を借りていくしかないんじゃない。」

リタはそう言つて、サトルとライルを目で促してキーナじいさんの後を追つた。

「おじいさん、これお借りできますか。」

「ああ、もう少し待つておれ。神への祈りの時間じゃて、済んでからな。」キーナじいさんは振り向きもせずと言つて、神殿の正面左手にある石碑の前にひざまずいた。高さ三メートル、幅二メートルほどの石碑は、茶褐色の一枚岩を削つて造られたやうで、これもかなり古いものとわかつた。

そしてじいさんの背後に近づくと、そこにも同じような神の文字が、一

面に刻まれていたのだった（次ページ参照）。

キーナじいさんは、その前にひれ伏し、そうして両手を上げ下げしながら、祈りの言葉を唱え始めた。それは意味不明ながら、なにか不思議なメロディをもった歌のように聞こえた。

「あれ？」

リタがふいにつぶやいた。

「どうしたんだ。」

ライルが心配そうに聞いた。

「しっ、ちよっと黙ってて。」

リタはライルを見向きもせずと言うと、そのメロディに魅了されたように小さくリズムをとりながら、目だけは石碑の文字を食い入るように見つめ出した。

第三章 キーナじいさん

トノノコノキナジイサン ヲソコノキナジイサン ノ  
サ マ ラ ン ジ ア ブ ラ ナ ル ノ

トコトコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
シ オ ト イ パ ロ ル デ ィ ア ス ノ リ ズ

トノノコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
バ マ ラ ン ジ ア アル バ ト ア ネ ス ト

トコノコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
タ バ ロ ア ヌ ト ブ ラ ウ ナ ミ ロ

トノノコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
サ マ ラ ン ジ ア ベ ル ダ エ ス ト

トコトコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
ス ト シ ヤ ヌ ゴ ル ド ア ク ラ ド

トノノコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
バ マ ラ ン ジ ア イ ル ウ エ ス ト イ

トコトコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
ロ コ イ セ ロ ホ ポ ア ウ ィ ゴ

トコトコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
シ ク ノ ア ト ラ ド ガ ズ ル

トコトコノキナジイサン ノコノキナジイサン ノ  
シ ク ノ ア フ ォ ソ ア モ イ セ イ ブ

『<sup>せきひ</sup>石碑の<sup>もじ</sup>文字』(上<sup>じょうだん</sup>段の<sup>もじ</sup>ホープ文字)と『キーナじ

いさんの<sup>うた</sup>歌』(下<sup>げだん</sup>段のカタカナ)

・テープの<sup>ピージーエム</sup>BGM1に<sup>たいおう</sup>対応しています

## 第四章 神の文字

リタにとっては短く、サトルとライルにとっては長く感じられた時間が過ぎた。

実際は五分間ほどだったが、やがてキーナじいさんの祈りは、大きなせき払いを合図のようにして終わった。

しかしリタは身動きすらしなかった。頭の中でメロディを反復するかのよう<sup>からだ</sup>に体を小刻みにゆすり、それでいて目は石碑から離れなかった。そしてその表情は真剣そのものである。

サトルとライルは顔を見合わせた。お互いの目は、リタがなにかをつかんだらしいと語り合っていた。祈りを終えたキーナじいさんまでが、リタ

の様子を不思議そうに眺めていたほどだった。

リタの視線が石碑の文字の下段までめぐって行ったとき、サトルは「リタ！」と小さく呼んでみた。

その声でリタが振り返った。彫りの深い顔が上気して、瞳は深い光を宿しているようだった。感動が全身にあふれているようにも見えた。

「いまの歌、私知っているの。」

リタの口もとに微笑みがこぼれていた。

「知ってるって？」

ライルの問いには答えず、リタはげげんそうな表情のキーナじいさんに言った。

「いまのお祈り、どんな意味かしら。」

「神をたたえる祈りじゃ。昔からこの碑の前で祈ることに決まっておるだ

けで、意味と言われてもそれ以上は知らんな。」

「でもさつき、おじいさんは神の文字は誰も読めないって言ってたけど、おじいさん、いま読んでたじゃない。」

「なに、わしが神の文字を読んでいたじゃと。」

キーナじいさんの表情に驚きの色が走った。サトルとライルも身を乗り出した。唯一の手掛かりである神の文字を発見したものの、それを読める人がいないと知って落胆していたのに、いままた一筋の、それもかなり期待の持てる光がさそうとしていたのである。

「おじいさん。」

リタはがくぜんとしているキーナじいさんに言った。

「いまの祈りの言葉は、この石碑に書いてあるわ。」

「じゃこの神の文字が祈りの言葉じゃというのか。本当か娘さん。」

「リタ、おまえ歌を知ってるって、この文字が読めるということなのか。」  
キーナじいさんとライルが同時に言った。サトルも意外な展開に目を見張っていた。

「歌を知っていたから、たったいまこの神の文字が読めるようになったのよ。」

「どうしてなんだ。」

ライルがせき込みそうになって言った。

「おじいさん、ここに座ってもう一度、祈りの最初の部分をささげてみて。」

リタの言葉でキーナじいさんがひざまづき、二人もそこに並んで座った。  
「サマランジャ ブラナ ルノ……。」

「そこまででいいわ。」とリタはキーナじいさんの祈りを制して石碑の冒

頭のとう一部を指いちぶさした。

「いまのがこの一行ぎようなの。」

・T C L C L C L T O C D U L L U L U L U T O

「ここにね、ラという音おとが二つ出でてくるでしょ。それが両方りようほうとも、T C にならなかつたわ。」

なるほど、とサトルはうなずいた。

「それから、ラ行ぎようの音おとでほかにルがあるじゃない。それが、T C になつてから、ラ行ぎようの音おとには、T C がついていると思おもうのよ。」

サトルとライルも、リタの説明せつめいに引ひき込まこまれていった。キーナじいさんだけは、ちよつと不審ふしんそうに首くびをかしげている。

「次に冒頭ぼうとうのサ、マ、ラだけど、これは全部ぜんぶア段だんの音おとよね。それが、T C L C L C L T O C D U L L U L U L U T O はア段だんの音おとにつくのよ。ためしに……。」



トリタは石碑の四行目の冒頭を指さした。

「TUDLOR JUTO ……」

「おじいさん、お祈りの中にタパロアって言葉がどこかにあるでしょ。」  
トリタは言って、じいさんがうなずくのを見て続けた。

「ここがそうなの。単語のはじめのタ、パと最後のアがア段の音だから、  
ほら、TUD・LOR・JUTUって、JUTUががついているでしょ。それに口はラ  
行の音で、LOだから、Jが前についてるじゃない。」

リタはそこまで言うのと三人のほうへ向き直って、スーパーペンを取り出して手にした。

「五十音表をつくって、この文字をあてはめていくと、もっとよくわかるわ。ライル、書くものがないからあなたのシャツ貸してよ、いいでしょ。」

有無を言わせぬ口調に、ライルは白いシャツを着ていたのが不運だったと諦めたのか、炎天下でシャツを脱いだ。そのシャツの背中部分にリタはペンを走らせる。

「五十音表に、とりあえずはじめの二行をあてはめてみるわね。」

キーナじいさんに祈りの言葉を唱えさせながら、  
T T T T T T T T T T  
と割り振っていく。

「ほら、この調子でやっていけば、五十音表は完成できるでしょ。」

(109 ページ参照。読者のみなさん、空白の部分を自分で埋めてみてください)  
さい)

やがて、表は完成した。

「これで神の文字は読めるわけじゃな。」

キーナじいさんにも結論はわかったようだった。

「しかし、リタ。」とサトルはずっと抱いだいていた疑問ぎもんを口くちにした。

「文字もじは読よめるようになったものの、やはり意味いみがわからないのは同じおなじやないのか。」

「それよ。」とリタは待まっていたように答こたえた。

「きつき私わたし、この歌うたを知しっていると説いったでしょう。私わたしの知しってる歌うたって、この祈いのりとメロディもほとんど同じおなじで、言葉ことばもね、ちよつと違ちがうけど、とっても似にてるのよ。びっくりしたわ。この祈いのりって、きつとなにかの歌うたかもしれないと思おもったほどのな。」

そのリタの思おもいはやがて明めい確かくになるのだが、ともかくいまは意味いみの解かい明めいが先決せんけつだった。サトルはリタの言葉ことばを待まった。

「いい、私わたしの知しってる歌うた、口くちずさんでみるわね。『サマランジャ フラールーニ』これが出でだしよ。『サマランジャ ブラナ ルノ』っていう

祈りとよく似てるでしょう。」

「でも意味がわからない点では同じさ。」

「大丈夫よ。サマランジャは昔々という決まり文句だからともかく、フラーナ ルーニーはね、『青い月』という意味なの。アーリー語でフラーナが『青い』だから、ブラナもたぶん同じ意味だと思おうわ。」

「アーリー語って、どこの言葉なんだい。」

「私のパパの故郷で使われている言葉よ。」

サトルは地球地図のインド地方を思い浮かべた。古い文明の栄えたところと学んだ記憶があった。

「パパに教わったんだね。」

「そう。その歌詞もここに書いてみるわ。」



リタは余白の少なくなったライルのシャツにまた書き込んでいった。


(カセットテープの歌詞カード参照)



「これで石碑の文字と私の知ってる歌が対照しているのよ。語順も合わせておいたわ。」

リタはそう言いながら、さらにシャツをやぶって石碑の文字を書き写していた。

サトルはその二つを見比べながら、なぞの文字が解明されてゆく興奮の中で、小さな疑問にいきあたっていた。

「リタ、同じように方角を示す言葉でも、エストとかネストっていうように、で終わっているのと、ウエストイって  で終わっているものがあるけど、どうしてだろう。」

「それが神の言葉の文法なんだと思うわ。『月』や『真珠』などの名詞だとか、それが主語として使われているときは  で終わっているでしょ。」

それから『青い』や『森の』のような連体修飾のときには、で終わっているわけ。そして『西へ』とか『愛を』とかの連用修飾の場合の語尾は、になつてははずだわ。だからエストは『東』、ネストは『北』でそのままだけど、ウエストイは『西へ』とか『西に』になるはずよ。」

(この章の末尾の注を参照)

「たいしたもんだよりタ。」とライルが感嘆し、サトルも言った。

「神の言葉に文法があつたなんて、いよいよこれは本物だぞ。そうすると、タパロつてのがわからない。」

「アーリー語でもタパロだけれど、なんだかわからないのよ。ヌトがアーリー語で木の実のことだからタパロはたぶん木のようなもの名前でしょう。それより、石碑は、解読できたんだから、さっきの石板よ。文字の読み方

がすんなりいけば、アーリー語と似てるからなんとか訳せると思うの。」  
そこがいよいよ核心だった。

「よし、早速やろうぜ。」

役に立つかどうかは別問題として、ライルもやる気になった。

石板の最初には

「HODD O TOUNJON OLTTO」<sup>と刻まれていた。</sup>リタが読みながら言った。

「ホーポだか、ホポだかって、これ、歌のほうでは『希望』<sup>きぼう</sup>だけど、きつとつながりからみて神の国の名前だ<sup>おも</sup>と思う。その次がシクノア イラトでしょ。シクノは『六つ』というアーリー語と同じだから、シクノアとなると『六つの』で、イラトはアーリー語の『島』<sup>しま</sup>を意味するイランダに似ているから、『ホーポは六つの島だ』と訳せるみたい。おじいさんがさっ

き言いったことと同おなじなのよ。」

「どうじゃ、わしの言いったとおり神かみの国くには六むつの島しまじゃったろう。」

キーナじいさんは、いかにも得意とくい満面まんめんという表ひょう情じょうになつた。サトルはほんの少すこしでも、キーナじいさんは知しつてとぼけているのではないかと疑うたがつていた自分じぶんを恥はじた。このじいさんは伝承でんしょう者しゃで、内面ないめんは人ひとの善よいじいさんなのに、新あたらしい地球移ちきゅうい民みんに受うけ入いれられなくなつて世よをすねたのかもしれない。

「ホーポつて、アーリー語ごではホープつていうんだけど、ホープのほうが響ひびきがいいから、こつちを使つかうことにしない。」

リタが提てい案あんすると、

「そうだ、オレの先祖せんぞが使つかっていた英えい語ごでも、希き望ぼうというのはホープだつたはずだ。偶ぐう然ぜんかもしれないけどホープつていいね。オレたちにとつても



神の国は希望の場所だからさ。」

ライルも賛成した。

「リタ、次だ。」とライルがせかした。

「次は『島は大きな一つと、小さな五つからできている』と訳せるみたい。アーリー語で数字は一からワノ、ツノ、スノ、フォノ、ファノって数えるの。そして次は……。」とリタが少しずつ訳していった言葉をつなげると、それは次のようになった。

『島の色はそれぞれ異なり、それは青、赤、茶、緑、金、そして灰色』

『それぞれの島には、地下に大地がある。そこで、それぞれのキルノを手に入れよ』

「地下に大地があるってなにかしら、それにキルノもよくわからないわね、葉かしら」

リタは小首をかしげながらも先へ進んだ。

「えーと、ここは『青い島では真珠。赤い島ではタパロの実』……この先で文字は消えているけど、これ……。」

「石碑の言葉と似ているっていうんだらう。」

サトルも同じ思いで言うのと、リタがシャツの文字を広げて見比べた。

「色の順番が同じだわ。青、赤、茶……それに少し離れているけど、青の次に真珠、赤の次がタパロの実。」

「じゃ、石板の消えている部分も推測できるんじゃないか。」

ライルが言った。

「そうだよ、これ自体が暗号かもしれない。」

「ともかく石板の消えてる後を訳してみるわね。」

『六つのキルノを持って、ホープの中心へ行け。六つのキルノが一つと

なって、扉は開かれ、汝は、大いなる力を得る』

「これだとキルノは薬じゃないみたい。」

「そうか『大いなる力』が薬のことかな。」

「ライル、きつとそうよ。石碑のほうも『六つの力が出会うと愛を救う』  
となってるし、若者がこの石板を頼りに得た薬で、恋人や人々を救ったん  
だから、『大いなる力』こそ薬と考えていいんじゃない。」

「そうだ。」とサトルも確信した。

「昔のキリル人にとって、いや、いまのキリルにとってもスード病の薬な  
ら、ものすごく大きな力だよ。その薬のことが伝承として残されてきた  
のは、当然のことだったんだ。」

なぞは解け、スード・ウイルスに効く薬のある場所も、なんとか見当は  
ついた。サトルは偶然に聞いたキーナじいさんの説教から、ここまでのた

どり着いたことを思つて、計り知れない感動が体のすみずみまで広がるのを覚えた。

あとは、キリルのどこかにある六つの島を捜し当てるのみだ。

「ねえ、早く帰つて島探しをしない。」

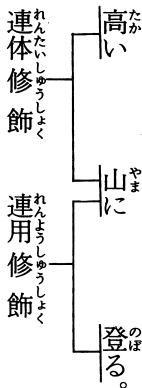
思いはみんな同じだった。三人は、途中から驚きのあまり口がきけなくなったキーナじいさんに礼を言つと、エアースクーターに戻つてビルフォードの街へと突つ走つた。

(注) ちゆう

- ・連体修飾れんたいしゅうしよく || 名詞めいし (もの な の名まえを表す言葉) あらわ にかかると (修飾する) しゅうしよく
- ・連用修飾れんようしゅうしよく || 動詞どうし (動作・存在・作用などを表す言葉) あらわ や形容詞けいようし

形容動詞けいようどうし (もの な の性質や状態を表す言葉) あらわ にかかると (修飾する) しゅうしよく

(例) れい



『高い』は『山』という名詞にかかるとのでこの関係を連体修飾と言い、  
 『山に』は『登る』という動詞にかかるとので連用修飾という。

## 第五章　マイミ

ビルフォードの街に帰り着いたサトルたちは、そのままライルの家へ直行した。キリル地理院のデータベースにアクセスして、六つの島のデータを調べるためには、高速のコンピュータを持っているライルのところが都合なのだ。

神の文字は読めた。第一のなぞは解けたのだ。しかし、すべてを解き明かすには、その場所を突きとめなければならぬ。

「ひどい。相変わらず汚い部屋ね。」

ライルの部屋へ入ったとたん、リタが悲鳴をあげた。しかしそれは、言うてみればあいさつがわりのようなもので、リタはここへ来ると必ずそう

叫ぶのが習慣になっっているのだ。だからライルも気にしない。

しかし、気にはしないといっても、部屋はすさまじい乱雑さだった。機械いじりが好きなだけあって、工具や部品が機械類の間に散乱して足踏み場もない。

とりあえずライルが、奥の壁ぎわのコンピュータデスクの前だけを片付け、なんとか三つのいすを置けるようにした。

「これでよし。」とライルがスイッチを入れると、デスクの前の壁にはめこまれた三〇インチディスプレイが明るくなり、それを確かめながらライルが言った。

「どこから手をつけるべきかな。」

「まず、六つの島で成り立っている諸島や群島を調べましょうよ。」

「そうだ、そこから手をつけるしかない。」

ライルとリタが言いながら、キーをたたいてデータベースへのアクセスにとりかかった。その作業をみながら、サトルは神殿を出るときからの疑問に思いをめぐらしていた。

キーナじいさんの祈りと同じ歌が、どうして地球にまで伝わっていたのだろう。考えてみれば当然の疑問だったが、暗号のキーが解けなかった興奮で、そこまで頭が回らなかったのだ。だがいまは、そこがすつきりではないと、六つの島の問題も解けないような気がする。

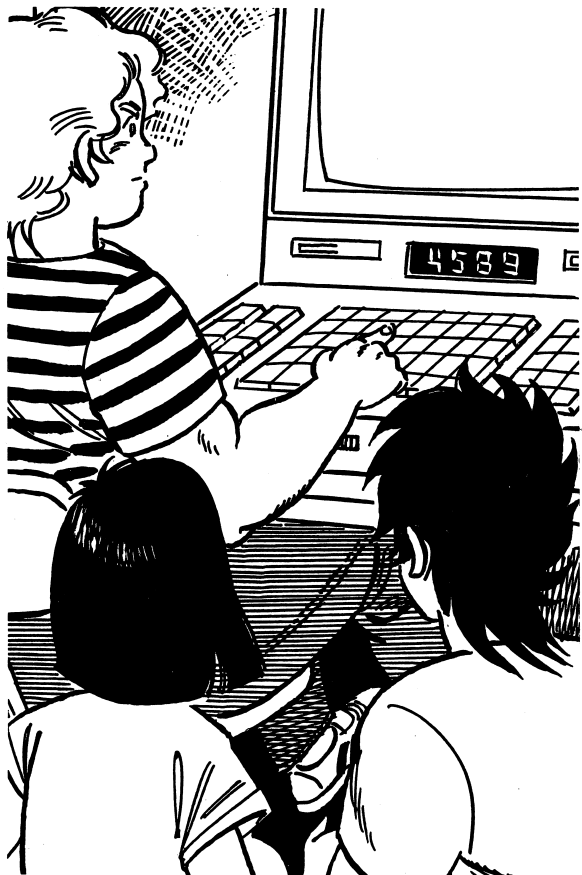
「これもダメね。島のひとつだけが大きいって条件に当てはまらないわ。」

リタがそう言ったときだった。サトルにはひらめくものがあった。

「待てよ、ホープって島じゃないぞ。」

「なんんだい突然に。島じゃなきゃわけがわからなくなるぜ。」





サトルの言葉でライルは驚いたようだった。

「いや、驚かせてごめんよ。でもライル、少し考え方を変えてみると、もう一つ別の解釈もあるんだ。」

「なあに、そんなのあるの。」

リタが目を見開いてサトルを見つめた。

「惑星さ、惑星だよ。」とサトルは、キョトンとした二人をみて言った。

「いまリタが、島のひとつだけが大きいって言ったろう。それでひらめいたんだ。銀河系のことを島宇宙という言葉は昔からあったよな。それがイメージになったとき、星とか惑星なんかも島と言えるんじゃないかと思っただ。もしホープが五つの衛星を持つ惑星だとしたらびったりだぞって。」

「なるほど、そうもいえるな。」

「いや、そうとしか考えられないんだ。キリルの伝説と同じ歌が地球にあるのは、偶然の一致で片付けられるかい。これは宇宙規模の話なんだ。」

「はるか昔に、キリルと地球とのつながりがあったという仮説ね。でもそれなら、誰かが星間飛行をしたことになるのよ。」

「リタ、それがホープ星の人だと思ってるんだ。ホープの人たちが星間飛行してキリルや地球にやってきたんじゃないかな。ひらめいてしゃべっているうち次第に仮説が整ってきたんだけど、ホープ人がキリルで神と呼ばれていたと考えたら納得がいく。」

「じゃホープ人がいたとして、どうして地球やキリルにわざわざ行ったんだろう。」

「うーん。」

リタの黒い瞳が、はるか昔に銀河を渡ったホープ人を追っているようだ。

三人とも一万年という気の遠くなるような時間で隔てられたなぞに、それ  
ぞれの想いを宇宙へとよせていた。はつとわれに返ったサトルがその沈黙  
を破る。

「いいかい、じゃあ仮説を簡単に整理してみよう。」

①銀河系のどこかに、五つの衛星を持ったホープという惑星がある。②  
ホープ人はかつてスード病を経験した。それは薬があるということだ。証  
明される。③さらにホープ人は星間飛行を行っていた。④キリルでスード  
病の流行に出くわしたホープ人はキリルの人々を助けた。⑤そこで若者  
の伝説がキリルで生まれた。

「それよ、それ。」とリタが感動していた。

「ホープ人はそれで神と呼ばれ、キリルを救った神の言葉は石碑と石板に  
のこされたんだわ。メロディもつけられたんでしょね。それを地球に行

ったホープ人が広めた。こうなるんでしよう。ねえ、ホープ星を捜そう。さっきの島の色って惑星や衛星の色なんだきつと。青、赤、茶、緑、金、そして灰色……。」

「なるほどなあ。よし納得がいったぜ。」

ライルも次第に目を輝かせた。

「だけどさ。」と今度はサトルが困惑する番だった。

「宇宙規模となると話がやっかいなんだよな。」

「そうか。うまくホープ星がみつかったとしても、私たちだけじゃ行けないものね。」

リタがため息をつくように言って、それで三人とも黙り込んでしまった。それは重苦しい沈黙だった。

ライルが立ち上がり、何かにつかれたように部屋を出ていったかと思う

と、手に一枚のカードをひらひらさせながらあわてて戻ってきた。

「ライル、なによそれ。」

ライルがニタリと思わせぶりに笑った。

「気持ち悪いんだから。変な笑い方すると不気味よ。」

リタの悪口を、ライルは無視して言った。

「オレの親父がさ、宇宙港コントロールセンターの副所長だつてこと、

まさか忘れてないよな。」

サトルは、その言葉で体で電流が走ったように感じた。コントロールセンターのコンピュータ用カード……と思つたとき、ライルがサトルの心の動きを読み取つたように言った。

「これでマイミと連絡がつくんだぜ。」

マイミとは、宇宙港を管理しているコンピュータのことである。

「それで五つの衛星を持つ惑星を捜すのか。」

「いや、折角マイミと連絡がつくんだから、もっと有効に使えないかと思つてさ。」

ライルの意図がサトルにはわがっていた。だから電流も走つたのだ。

「まさか、ライル……。」

リタもわかつたようだった。

「いいじゃないか。どうせキーナじいさんの話をしたって、誰も信じる人はいないよ。あの石板だって、スード病の薬と明言してあるわけじゃないんだ。それに伝説の若者は、たった一人で行つたんだぜ。」

「伝説はそこまであてになるとは限らないよ。」

「それはわかつてるさ。でも考えてもみなよ。宇宙港っていま閉鎖中だろ。コンピュータも船もヒマを持て余してるんだぜ。」

ライルの目が異様に輝き出していた。

「サトル、おまえの夢は宇宙船のキャプテンだろ。オレに任せてくれな  
いか。」

サトルは返答に困った。リタも心持ち顔色をあおくしてうろたえていた。  
「でもねえ……ライル本気なの。」

「ああ、いやならおりてもいいんだぜ。」

ニタリ顔が消え、すごみさえ顔に出したライルがカードを差し込む。

『はい、こちらはマイミ』

すぐに回線がつながり、ディスプレイ脇のスピーカーから単調な合成  
音声<sup>おんせい</sup>が流れてきて、ライルが質問に入った。

「マイミ、五つの衛星を持つ惑星は、銀河系にいくつあるんだ。」

『現在知られている範囲で五六七二八です』



声と同時にディスプレイに数字が表示される。

「えーっ、そんなにあるの。」

マイミの答えにリタがまゆをひそめた。

「じゃあ、その中で高等生物が住める可能性のある星はいくつある。」

この質問はサトルの発案によるものだった。

『三〇です』

「うまいこと絞ったわね、ずいぶん極端に減ったもの。」

リタがげんきにもすぐ笑顔になった。

「じゃあ、その中でスード流星群の軌道上にあるものはいくつある。」

『スード流星群については、流星が生まれる仕組みや、正確な軌道は不明ですが、わかっている範囲内ですと、一つだけです』

「やったね!」「やったぜ。」とリタとライルが同時に叫んだ。リタの気

分はくるくる変わる。しかしサトルは慎重だった。ライルに代わって、確認の質問を続けた。

「惑星の名はわかるかい。」

「名前はあります。ラープ星系の第四惑星です」

ラープとホープが似ているのは、ただの偶然だろうか。

「じゃ、その惑星の色はどうかね。」

「データがありません」

「衛星についても同じだね。」

「はい、これもデータはありません」

「よし、それじゃもうひとつ念のため、別の角度から聞いてみよう。さっきの三〇の星の中に、五つの衛星の色がすべて違う星はあるかい。」

「二五の星についてしかデータはありませんが、その限りでは質問に該当

する星はありません』

それでもサトルはしつこく質問を続けた。しかしラープ第四惑星がホー  
プ星なのではないかという推定を、ゆるがすまでの回答はなかった。そこ  
でサトルは、最後にその星まで行く時間を聞いた。

『宇宙船にもよりますが、ハイパーワープを使って二カ月くらいです』  
船さえあれば、十分に行ける範囲である。

ライルがいよいよ肝心の質問に入った。

「マイミ、君は宇宙船のコントロールをしているんだね。」

『そのような、当然の質問はしないでください』

「なまいきなコンピュータだ。」

とライルがつぶやく。

「君が管理している宇宙船を一隻、その惑星へ飛ばせられるか。」

『命令めいれいがあれば飛とばせます』

「誰だれが命令めいれいを出だすんだい。」

『人間にんげんです』

「じゃあ、オレが命令めいれいしたらどうだ。」

『あなたには、その権利けんりがありません』

「そこをなんとかする方ほう法ほうはないのか。」

『ありません』

そっけない返答へんとうだった。ライルが考かんがえていたほど、現実げんじつは甘あまくなかった。サトルは肩かたを落おとしたライルをみて、まったく別の角かく度どからマイミに質しつもん問もんすることを思おもいついた。

「ぼくらがその惑星わくせいへ行いく方ほう法ほうはないか。」

『いくつでもあります』

「今度は、有望な返答だった。」

「たとえば、どんな方法だい。」

『宇宙船を買うか、作るか、借りることです』

「お金がない。」

『乗組員になる方法もあります』

「最低であと三年はかかる。すぐ行きたいんだ。」

『あまり勧められません、盗むか、乗っ取る方法もないではありません』

ん

「犯罪者にはなりたくないよ。」

『ずいぶん条件が厳しいですね』

「どうしても行かなきゃならないんだ。」

サトルはそう言う、自分がすでに決心していることに気づいた。

マイミは可能性を検討しているらしく、三〇秒ほど黙っていた。それは長く重い時間だった。

『すべての条件を完全には言えませんが、なんとか満たす方法がひとつだけあります』

「ほんとか。」サトルは叫んでいた。

「それはどんな方法なんだ。」

『廃船になる宇宙船を利用する方法です。二日後に登録を抹消され、展示用としてアルーガ公園に送られる「ネブラ」という船があります。それを、その夜から明け方までに動かしてしまえばいいのです』

「やっぱり泥棒じゃない。」

しばらく黙っていたリタがあきれ顔をした。

『いいえ、泥棒にはなりません』

「どういうことなの。」

リタが言った。

『二日目が終わる午前零時をもって、私はネブラの登録を抹消します。その時間に船の管理者はいなくなるわけです。そして翌朝、ネブラはチェックされて、公園管理局のコンピュータに公園の備品として登録されるのです。その間なら、ネブラは誰のものでもない廃船ですから、乗っても泥棒にはなりません』

「だけど、次の日にはやっぱり泥棒になるわけでしょう。」

『いいえ、次の朝にチェックできなければ、公園管理局での登録はできませんから、ネブラは依然として廃船中で、その間は誰が使っても犯罪にはなりません』

「ふーん、変な理屈ね。」

リタが首をかしげたとこで、サトルは再び肝心のことを聞いてみた。「でも廃船じゃ燃料も何もないんだろ。」

『それは私がかんとかします』

マイミは自身ありげに言つてのけた。

サトルは、そんなことが本当にできるのかと尋ねようとしたが、詳しいことは明後日、もう一度アクセスして確認することにして回線を切つた。

「やってみるか。」とライル。

「ちよつと不安だけど、こつなつたらマイミの言うことを信用して、覚悟を決めるべきね。」とリタも言つた。

サトルはあまりにも目まぐるしかつた一日の展開に戸惑いながらも、心の底からふつふつと闘志が沸き上がってくるのを感じていた。

そうして、ライルが妹を、リタが父のことを考えているに違いないと



思うと、エミリアの面影がほうふつとしてきた。とりあえず二日間は動きようがないのだ。明日は、エミリアとどこかへ遊びに行こう。ホープ星まで一緒に行ければいいがとも思ったが、どんな危険が待ち受けているかわからないのだ。

いまはただ、スード・ウィルスの抗体になると思われる薬を持ち帰ることに専念しよう。サトルは、それが三人の使命なのだと思った。

## 第六章 出発

ひっそりと静まりかえったアルীগ公園の広場に、その日に到着したばかりのネブラは、その巨大な船体を横たえていた。

公園広場のほのかな照明が、船体の下へ淡い影を落としている。

午前零時を回ったとき、三つの人影が走り寄ってくると、周囲に張りめぐらした鎖をぐり抜けて乗船口に近寄っていった。ネブラの淡い影の中に人影も淡くなった。

入口横のキーボードから暗証番号一一〇四が入力されたのだろう、ドアが滑るように開き、ほの暗い船内へと三つ目の人影がすっと消えたとき、ドアはまた音もなく閉じられた。

ドアの閉鎖と同時に船内が明るくなった。

『もう声を出してもかまいません』

コンピュータの声に三人の緊張がとけた。ライルが大きな肩で息をし、

リタがホッと吐息をもらした。

「手配どおりやってくれたようだな。」

サトルも肩の力が抜けて、コンピュータへ気軽に話しかけた。

『はい、燃料と食糧は十分です。装備は十分というわけにいきません

でしたが、重火器「ツイン砲」、「キャノン砲」、小型の一人乗り移動用カ

プセル「ウリユー」一台、その他を用意しています』

そうして細部の説明があったあと、コンピュータは付け加えた。

『私自身がこの船に乗り込んでいますから、決して手抜かりはありません』

「えーっ、マイミなの。」

「どうしてマイミがいるんだ。」

リタの叫び声。どうやらマイミは、ネブラのコンピュータに、自分の主要部分のソフトウェアを転送してしまったらしいのだ。

『説明はあとです。とにかく出発しましょう』

マイミが推進機を作動させはじめていた。低いうなり声のような音がして、船体が少しずつ浮き上がってゆく。

『どなたか、発進命令を出してください』

マイミは人間の命令がないと、勝手に飛び立つことはできないのだった。

「よし、発進！」

サトルが号令を下した。

ネブラは静かにその巨体を浮上させると、やがて加速しつつ夜空へと溶けていった。

浮上感も加速感もなくなって船内が落ち着いたとき、サトルはいよいよ使命遂行の旅に出たことを実感した。未知なる前途には希望ばかりではなく、どんな難関が待ち受けているかもしれないのである。

だがライルもリタも、目には輝きがあった。

リタは自分の解説が現在の行動につながった喜び、ライルはすぐ機関室へ行って計器類に触れた喜びもあったが、その目の輝きをサトルは、自分と同じに使命感に燃えたものだと思った。

目的のラープ星系まで、ネブラの能力をフル作動させてハイパーワープすれば六二日間で着ける。

その間に三人は、計器の見方、データの読み方、手動操縦の方法などをマイミから学ぶことになった。

それらは、ほとんどマイミが自動的に操作できるものである。しかし進

ろ路や行動こうどうについての最終さいしゅう決定けつていは、サトルたちが下くださなければならぬ場合あひもあるのだ。さらに万まんが一、マイミにトラブルがあつたときのことも考かんがえに入れねばならない。

学まなぶことは多く、六〇日にち間はそれこそ瞬またたく間に過すぎた。

そうして最後さいごの総仕上そうしあげとして、サトルは移動用いどうよう小型カプセル「ウリュ  
ー」の操縦そうじゆう、ライルとリタはツイン砲ほうやキャノン砲ほうの扱あつかいをかんぺきに  
こなせるまでになつたところで、宇宙船うちゅうせんネブラは、いよいよ最後さいごのハイ  
パーワープを終おえてラープ星系せいけいに入はいつたのだつた。

船内せんないのスクリーンに目的地もくてきちが映うつし出だされてくる。遠とほくからみた第四惑星だいしやくせい  
は、確たしかに五つの衛星えいせいに取り囲かこまれて浮うかんでいた。

そして近ちかづくにしたがつて、それらの衛星えいせいはそれぞれに微妙びみょうに色彩しきさいの異こと  
なることが鮮明せんめいになり出だしていった。

「おい、見ろよ。」

拡大スクリーンの映像を操作していたライルが叫んだ。

「石板に書いてあったのと同じだ。一番外の衛星は青っぽくみえるし、次のは赤っぽい。」

確かに五つの衛星は、青、赤、茶、緑、金と微妙に色彩を変えて輝いてみえた。

「間違いない、ここがホープなんだ。」

「来たのね、とうとう。」

サトルの両手を、ライルとリタが握りしめていた。興奮がその手を通して伝わってくる。サトルも上気していた。

船内にマイミの声が流れる。

『宇宙航行法では、知的生命体のすむ可能性がある惑星へ降りるとき、

一番外側の衛星から順を追って訪ねて行くことになっていきます。本星に直接着陸しようとした場合、相手側から攻撃を受けても文句は言えないのです。ではネブラの軌道を第五衛星に向けます」

マイミだけは冷静だった。

三時間後、通常ワープを終えたネブラは、第五衛星から四〇〇〇キロの距離まで接近していた。

やがて、青い色の第五衛星がぐんぐん大きくなってスクリーンに映し出されて来た。

「変な地面ね。」

リタが不気味そうにつぶやいた。

金属的な青味を帯びた地表は、幾何学的な模様に覆われている。どうみても人工のものと思えないのである。しばらく行くと、地下へ続いて



いると思おもわれるゲートのようなものが見みえてきた。

「おい、あれをみるよ。やっぱり石せきばん板の言ことば葉のように地ち下にもうひとつの大地だいちがあるんだ。」

ゲートを指ゆびさして、サトルが言いった。

「まるで地じ獄への入いりぐち口ね。」

「バカ、ろくでもないこと言いうなよ。それにしても、地ち下かに大だい地ちがあると  
いうより、大だい地ちの上じょうくう空をシールドで覆おおつてあるっていう方ほうがびつたりく  
るような感かんじだな。」

ライルが、サトルとリタの顔かおを見みながら言いった。

「けど、ゲートがあの大おおきさじゃあ、ネブラで入はいるわけにはいかないぜ。」  
「ああ、他ほかに大おおきな入いりぐち口があるなら話はなしは別べつだけど、ウリユーで行いくしか手て  
がななさそうきな気きもするな。」

サトルがそう言い終わった瞬間だった。

『ピーッ、ピーッ』と警報システムが断続的な音を鳴らしはじめた。ブリッジ内の照明が緊急照明に切り替わると同時に、リタが急激な加速にうめいた。マイミが最大戦闘速度までネブラを加速したのだ。

『座標一三六、二八、九一。距離三〇〇〇。未確認の飛行物体です。速度八〇、われわれとの接触まであと四二秒です』  
スクリーンから目を離さないでいたリタが叫んだ。

「戦闘宇宙船みたいよ！」

さて、この続きは皆さんが実際にゲームで体験することになります。ホープで葉をみつけることができたなら、再びここへ戻ってきてください。では、幸運を祈る！

第七章 だいいしやう 再び ふたたび キリルへ

「ウリユー」のハッチを開け、カプセルを出したサトルは、手にした薬のピンをライルとリタに見せた。緑のトロリとした液体が、プラスチック型硬化テクタイトの容器に入っている。

「やったな、サトル。」

「どうとう手に入れたのね。これで父もみんなも救われると思うと……。」  
リタは涙で言葉を詰まらせていた。

「やりましたね」

マイミの声さえ、心なしか弾んで聞こえた。

「ありがとう、みんなで力を合わせた結果だよ。」

サトルも、これまでの苦闘を思うと胸に熱いものがこみ上げていた。

しかし、薬の効能を試したあとでなければ喜ぶのはまだ早い。経過から考えても完全だとは思うが、なにしろ気が遠くなるような年月を経た薬品なのだ。化学変化を起こしている可能性だっただけはないのである。

「マイミ、この薬でウイルスがどうなるか実験してみてくれ。」

サトルはマイミのロボットハンドに薬の容器を渡した。キリルから持ってきたスード・ウイルスがどうなるか、その結果をみる必要があった。それにはもう少し時間がかかる。

検査の結果が出るまでに、とサトルは思っ一枚の写真を取り出した。

「リタ、もうひと仕事やってほしいんだ。」

「なによ、変なもの拾ってきたんじゃないの。」

リタは言いながら写真を手にした。そこにはホープ文字が刻み込まれた

石碑が写っている。一緒に写っている樹木からいっても、かなり巨大な石碑らしいとわかった。

「ホープ星で見つけたんだよ。なにか重要なことが書かれているみたいだったから、写真に撮って持ってきたんだ。訳してみてくれないか。」

リタの目が写真の文字の上を追っていく。それは徐々に真剣になっていった。首を振り、うなずき、そうして悲しげな表情をみせながら、リタは写真に顔が触れるほどに近づけて読み進めていった。

「どうだい、何かわかったかい。」

ライルが横からのぞきこんで聞いた。

「すごいわ。これでホープのなぞがかなり解けるみたいよ。」

リタは興奮ぎみに言いながらも、目は文字から離れなかった。ライルの目が期待に輝いていた。それはサトルも同じだった。

「サトル。あなた、今のホープにいるテレパシー人種は、昔キリルに來たホープ人と違うような気がするっていつてたわね。」

「ああ。今のテレパシー人種もそれなりに文明をもっているけど、あの文字を読めないし、それにとりどころにあった機械の使い方なんかも知らなかったくらいだからね。でも、そのことがそこに書いてあるのかい？」

「そうなのよ。今言った文字とか機械とか、それに不思議な生物のことも、これを読めば想像がつくわ。いい、読むわよ。」

リタが訳しながら読みあげた石碑の文字は、次のような内容だった。

《ホープ暦八三五四年

ホープはいま、恐ろしい危機を迎えている。それは、ホープにエックス線天体が近づきつつあるからだ。

この天体は今後、数千年にわたってホープのあらゆる生命体に大きな変

異をもたらずと予測される。

エックス線天体が相手では、プロテクトシールドもほとんど役に立たない。われわれが長い間の努力で維持してきた平和が、いま自然の手によって破壊されようとは、まことに皮肉なことと言わねばならない。

われわれは、このホープを離れ、宇宙放浪の旅に出ることを決意した。エックス線天体の影響が完全に消えるのは、およそ八〇〇〇年後と推定される。そのとき、われわれの子孫は長い放浪の旅を終えて再びこの地に戻り、文明を復活させることになるだろう。

栄光あるホープ星に、再び文明の復興を祈って。

ホープ首長    ラト    ス

そしてその下には、ファブの神殿にあった石碑の歌詞、サトルたちが薬を捜す手掛かりとなったあの文字が刻まれていた。

「これは、ホープの人々が自分達の大地をたたえた歌なのよ。そうよ、国歌かもしれないわ。遠くホープを離れた人たちが異境の地でなつかしい故郷をしのんで歌った歌が、その地に伝承として残されていったんだわ。」

読み終えたりタガが、上気したほおに手を当てて冷やしながら、叫ぶように言った。すかさずライルが興奮して付け加えた。

「そうか、キリルを救うためだけに残したメッセージなら、何も石板と石碑の両方に同じ内容のものを残す必要はないし、スード流星群の軌道にない地球に伝える必要もないというわけだ。」

「うん。それに第一、わざわざホープの石碑の最後に書いているのもおかしい。おそらく、キリルに石板が残された前回の流星群のときと、石碑の歌が伝えられたホープ滅亡の頃とは、かなりの時間の隔たりがあったんじゃないかな。」



「その間に、石板に残したメッセージが、いつのまにか国歌になったというわけね。」

いろいろなことが、すべて筋道が合ってわかってきた。

「とすると……。」とライルがその興奮をおさえかねたように言った。

「その歌がいまも伝わっているということは、キリル人や地球人はホープの子孫だつてことなのかい。」

「いや、そうとも限らないと思う。ホープ人が地球やキリルに行ったところは、きつと両方とも未開の状態だったんだ。だから天から降りてきたホープ人を神としてあがめ、神の歌をそのまま大切に伝えたと考えたほうが自然な気がする。」

「だったらホープ人たちは、いったいどこへ行ってしまったんだらう。いまホープにいるのが、放浪から戻ってきた人たちとは、とてもじゃないが

「かんが  
考えられないもんな。」

「そうね、エックス線天体がやってきたころの生物が、変異した結果じゃないかしら。」

サトルは、ホープの奇妙な生物たちを思い出して、いまさらながら身震いした。

「ホープ人って、やっぱり地球にすみ着いたんだとオレは思うぜ。」  
ライルは両手を後ろで組んだまま、椅子の背もたれに巨体をずしんとぶつけて言った。

「ホープ人っていまもどこかを放浪しているんじゃないかしら」  
リタの瞳は遠く銀河の果てを見ている。

「ところでサトル。」とライルが椅子から身を起こしながら聞いた。  
「最後の薬はどうやって手に入れたんだい。」

「あの歌にあった六つの宝が、薬のある場所の扉を開く鍵だったんだ。」

「ふーん。じゃあ、キルノっていうのは鍵っていう意味だったのね。」

リタは一人で納得していた。

その時、マイミの声が響いた。

「結果ができました。確かにこれはスード・ウイルスに強い効果があります。これでキリルを救えるでしょう。」

サトルたちがあの奇妙な生物をやっつけたように、ホープの薬が強い抗体となつてスード・ウイルスを次々に打ちのめすのだろう。

マイミの声が終わらないうちに、ライルが飛び跳ねながら何度も「ヤッホー！」と叫び出した。リタは何も言わずに泣き出した。

サトルも目頭に熱いものを感じていた。閉じたまぶたの裏にエミリアの面影が浮かんだ。そして両親、チャドラ先生、ライルの妹……。

ライルが、リタが、サトルの手を握りしめていた。三人は堅く手を握り合つて、お互いの眼を見つめ合つた。なにも言わなくても気持ちには痛いほどわかつた。

「よし、出航だ！」

スクリーンに映るホープ星の大地が次第に遠ざかっていく。

苦しかったけど懐かしい。

思いは三人とも同じだった。

地平線が大きな弧となり、やがて円となつて小さくなつていった。そうしてホープが小さな六色の点となるまで、三人はスクリーンの前から離れられなかつた。

そのホープを見ながらサトルは思つた。自分達のこと、一万年後のキルルに、伝承となつて残されているだろうか、と。

あ ア	い イ	う ウ	え エ	お オ					
か カ	き キ	く ク	け ケ	こ コ	が ガ	ぎ ギ	ぐ グ	げ ゲ	ご ゴ
さ サ	し シ	す ス	せ セ	そ ソ	ざ ザ	じ ジ	ず ズ	ぜ ゼ	ぞ ゾ
た タ	ち チ	つ ツ	て テ	と ト	だ ダ	で デ	どう ドウ	で デ	ど ド
な ナ	に ニ	ぬ ヌ	ね ネ	の ノ					
は ハ	ひ ヒ	ふ フ	へ ヘ	ほ ホ	ば バ	び ビ	ぶ ブ	べ ベ	ぼ ボ
ま マ	み ミ	む ム	め メ	も モ	ぱ パ	ぴ ピ	ぷ プ	ぺ ペ	ぽ ポ
や ヤ		ゆ ユ		よ ヨ	ふあ ファ	ふい フィ	ふう フウ	ふえ フェ	ふお フォ
ら ラ	り リ	る ル	れ レ	ろ ロ					
わ ワ	うい ウイ		うえ ウエ	を ヲ	ん ン				

ごじゅうおんひょう  
『五十音表』

リタが<sup>かみ</sup>神の<sup>もじ</sup>文字の<sup>さいしよ</sup>最初の<sup>ぎようぶん</sup>二行分を<sup>か</sup>書き<sup>い</sup>入れていま  
す。<sup>どくしや</sup>読者の<sup>みなさん</sup>みなさんも、<sup>じぶん</sup>自分で<sup>つづ</sup>続きを<sup>か</sup>書き<sup>い</sup>入れてく  
ださい。神の<sup>かみ</sup>文字<sup>もじ</sup>だけでは<sup>う</sup>埋まり<sup>ぶぶん</sup>きらない<sup>ぶぶん</sup>部分もあ  
りますが、<sup>あと</sup>後は<sup>じぶん</sup>自分で<sup>すいり</sup>推理<sup>して</sup>みて<sup>くださ</sup>い。

アーリー語辞典

〔意味〕 アーリー語

〔色〕

あおい 青  
あか 赤  
きんいろの 金(色)の  
ぎんいろの 銀(色)の  
しろい 白  
ちやいろの 茶(色)の  
はいいろの 灰(色)の  
みどりいろの 緑(色)の

フラーナ  
ルージャ  
ゴラド  
アルゲンタ  
ブラーカ  
ブラワナ  
グレア  
ベルダ

たいよう 太陽  
つき 月  
ほし 星

スーニ  
ルーニ  
スチロ

〔人体〕

あたま 頭  
くち口  
て手  
ほね 骨

カーポ  
ブソ  
マノ  
ナボ

〔場所〕

いわ 岩  
うみ 海  
かわ 川  
しま 島  
ちゅうしんち 中心地  
とち 土地  
ぬま 沼  
はたけ 畑  
はま 浜  
みずうみ 湖  
もり 森  
やま 山

ロキオ  
マリノ  
リボ  
イランダ  
メゾネ  
ラーダ  
マロ  
フィルダ  
ミオータ  
ロコ  
アルバータ  
モンティオ

〔その他〕

あい 愛  
せきぞう 石像  
あなた

アーモ  
ストア イマゴ  
ビオ

〔動詞〕

行く  
かがや 輝く  
～である  
てに入れる  
～になる  
のぼ 昇る  
ひら 開く  
みる みる  
持つ

イーロ  
シャーヌ  
エスル  
ゲーツ  
ゲティヌ  
リルズ  
アピーヌ  
ビド  
ハルド

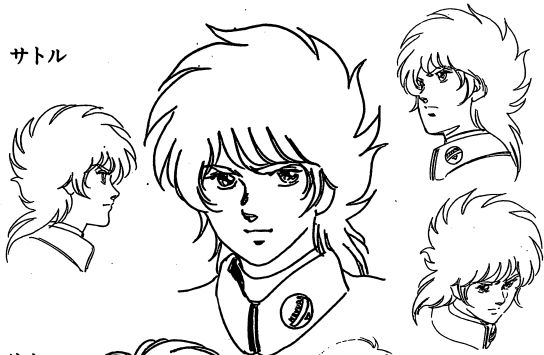
〔天体〕

そら 空

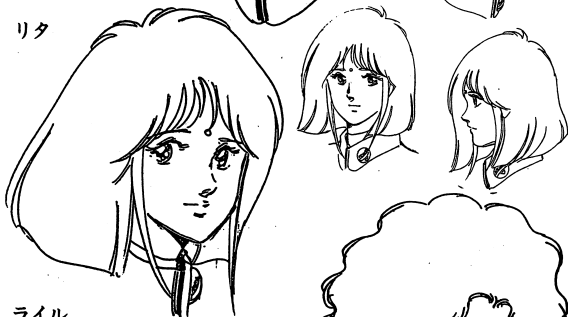
ティエラ

おかざき  
岡崎 つぐお キャラクターデザインノート

サトル



リタ



ライル

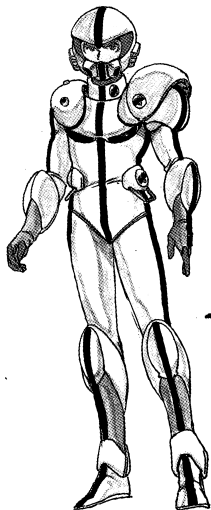


岡崎 16

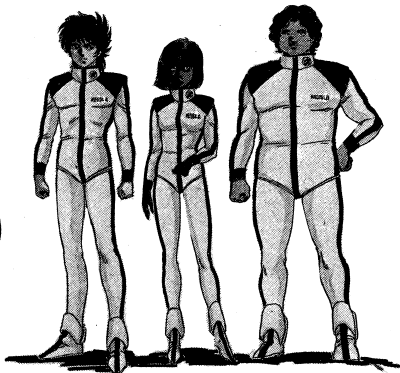
おかざき

岡崎つぐお

メカ・コスチュームデザインノート



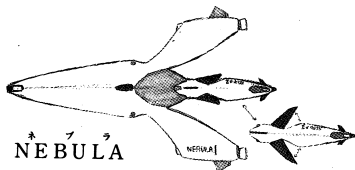
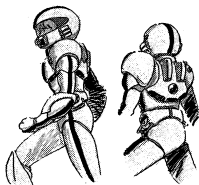
パワースーツ



ライル

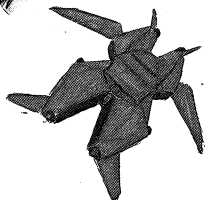
リタ

サトル



ネブラ  
NEBULA

ウリュウ  
URYOU



てきせんとう うちゅうせん  
敵戦闘宇宙船

*Handwritten signature*